

# ジェイン・オースティン『エマ』

宮崎 孝一

## (1) エマとナイトリー

『エマ』開巻第一章で、二十一歳のエマ (Emma) と父親のウッドハウス氏 (Mr. Woodhouse) とは、夕食のあと、憂愁に沈んで向かい合っている。十六年間この家に家庭教師として住み、家族の一員として父親にとっても娘にとってもよい話し相手だったテイラー嬢 (Miss Taylor) がこの日ウェストン氏 (Mr. Weston) と結婚し、ウッドハウス家のあるハートフィールド (Hartfield) を離れてしまったからである。さて、父の気持を引き立てるためにエマがバクガモンの用意をしようとしていると、客が入って来て、その必要はなくなる。客はエマの義兄に当たる農園主ナイトリー氏 (Mr. George Knightley) である。ナイトリー氏の登場のタイミングのよさは、この物語の今後におけるこの人物の役割の重要性を予言しているかの如くである。

エマはナイトリーに、結婚式の様子などを話し、この結婚は自分がまとめた縁だったのだと自慢する。すると、ナイトリーは、エマのこの言葉に異議をはさむ。

「……あなたのいわゆる縁結びか、ただ、ある暇な日にあなたが『もし、ウェストンさんがテイラーさんと結婚することになればすごく素敵だと思うわ』と独りつぶやき、その後も、折々に同じことをつぶやいたというだけのことだったら……どこにあなたの自慢する種があるのです？ あなたの思いつきがうまく当たったというだけのことじゃありませんか」(I, i)。

エマはこの指摘に承服せず、「あなたは、幸運にもうまく当たった想像の喜びと誇りをご存じありませんの？ お気の毒な方だわ」(I, i) と

やり返す。ナイトリーは三十七、八歳ということになっており、エマとは年齢が十五歳以上も違うが、二人はこのように何事も遠慮なく話し合える間柄なのである。

さて、エマが、ハートフィールドの女子寄宿学校の校長ゴダード先生 (Miss. Goddard) から紹介された年下の友達ハリエット (Harriet Smith) と親しさを増すことに、ナイトリーは不安を感じる。作者は、エマの問題として、「あまりに何でも思いのままにできすぎる力と、自分を少々よく評価しすぎる傾向」(I, i) を指摘しているが、ハリエットは正に彼女のこの傾向を助長する存在のようにナイトリーには思われるからである。彼は、ウェストン夫人に会ったとき次のように言う。

「ハリエットは、エマが持ち得る最悪の友達だと思いますよ。あの娘は、自分が何も知らないで、エマは何もかも知っているものと思っています。あらゆる点で人を褒めるのが好きなのですが、下心がないだけに、相手に対する悪影響は一層強いことになります。あの娘の無知は、絶えず相手を思い上がらせる種になっているのです。ハリエットのそういう頼りない様を見て、どうしてエマは、自分には学ぶべきことがまだまだあるなどと考える気になるでしょう」(I, v)。

ところで、年頃の娘として、エマも結婚ということに興味がないわけではないが、自らこの人生の大事に commit しようとは思わない。彼女はハリエットに向かって次のように言う。

「わたしには、普通の女の人のように結婚しようという気持はないの。そりゃ、もし私が恋に落ちれば話は別でしょうけれど。でも恋をしたことなんてないわ。私の生き方にも、私の性質にも合わないことなのよ。これからも恋をすることなんてないと思うわ。で、恋ということもなしに、今の私のような境遇を変えたとしたら愚の骨頂よ。財産がないわけじゃないし、暇で困っているわけでもないし、みんなから軽く見られてるってわけでもないのだから。私が父の家で思いのままにふるまっている半分ほども、世の奥さまたち

は、ご主人の家で自由を与えられてはいないと思うわ」(I, x)。

このような考えのエマが、自分の代りに、恋愛から結婚への道を進ませる puppet として選んだのが、他ならぬハリエツトであった。エマは、何の根拠もなしに、ハリエツトは立派な身分の紳士の娘なのだが事情があつてゴダード塾に預けられている身なのだとロマンスめいた想像をし、それ故、ハリエツトの相手もれっきとした紳士でなくては釣り合わないと思つて決めた。その資格のある者としてエマが選んだのは、村の牧師、エルトン (Rev. Philip Elton) であった。

この頃、ハリエツトは、既に自作農のロバート・マーティン (Robert Martin) に相当好意を感じるようになっていた。しかし、身分と家柄と教養を第一に重んずるエマから見れば、マーティンは全然問題にならない人物であった。『農事報告』などの本は読むが、文学書などは名も聞いたこともないという男では、将来金持にはなるにしても、ほかの点では欠陥ばかりであろう。それに比し、エルトン氏は、本物の紳士だし、低い縁故関係などもなく、そうかと言って、ハリエツトの出生の疑わしさに真っ向から盾をつくほどの家柄でもない。エルトン氏こそ、ハリエツトの頭からあの農夫を追い払うのに最適な人物だとエマは思ったのである。そして、様々な機会を作ってエルトンとハリエツトを近づけることに努力する。その一つとしてエマはエルトン立ち合いの上で、ハリエツトの肖像を描き、エルトンはそれを額縁に入れてもらうためにロンドンへ行くという労を取ることになる。

こうして、ハリエツトの心が大きくエルトンに傾きかけていたとき、マーティンから彼女あての結婚申し込みの手紙が来る。今や万事、エマの指示に従うことになっているハリエツトは、手紙をエマに示して進退を決めてもらおうとする。

エマはその手紙を読んで驚いた。手紙の文体は、彼女が予期していたよりもはるかに立派だった。文法上の誤りがないのみならず、文章としても、紳士の筆に成るものと称しても恥ずかしくないものであった。用語は平明だが、力がこもり、気取りがなく、伝えている感情は、筆者の人柄の高潔さを思わせるものがあつた。短い手紙だったが、良識、温かい愛情、寛大さ、礼節、さらに感情の繊細ささ

え表わしていた (I, vii)。

さすがにエマはハリエットに対して、立派に書けた手紙であることは認めるが、「わたし、どうすればいいのでしょうか」というハリエットの質問は、巧妙にはぐらかしてしまう。つまり、ハリエットは、マーティンの求婚を承諾すべきかどうかを尋ねたのに、エマは、断わるのは自明のこととし、ハリエットは、その表現の仕方について尋ねたものと決めてしまうのである。そして、その線に沿って話を進めることになる。ここでエマは詐術を用いて、ハリエットのマーティンを恋する心を振じ曲げてしまったわけである。結局、ハリエットは、マーティンに対する断わりの手紙を出すか、それはエマが大幅に手を入れたものだった。

その翌日、ナイトリーがエマの家に来て、ロバート・マーティンがハリエットに求婚することになったことをニュースとして告げる。ナイトリーは、二日前にこのことについてマーティンから相談を受け、賛成の意を表したのであった。この求婚に対してはハリエットが既に断わりの返事を出した旨をエマから聞かされたナイトリーの驚きと憤慨は並大抵のものではなかった。彼から見れば、ハリエットは、誰とも知れぬ者の私生児で、生活の安定性はなく、れっきとした親戚もありはしない。つまり女子塾の特別寄宿生以外の何者でもないし、きれいで気立てはいいにしても、知能は弱い小娘に過ぎない。その彼女が、マーティンのような財産もあり、境涯もよく、慎重で誠実な青年の申し出を蹴るとは！エマがこの問題で演じたと信じられる役割のことを思うと、ナイトリーはたまらない気持になるのであった。

この件に関して、エマは確かに、「自分の思いのままにやり過ぎた」観がある。これに比し、ナイトリーは、はるかにバランスの取れた大人の目で見ていると言えよう。

次にエマとナイトリーとの意見が食い違うのは、ウェストン氏の息子フランク・チャーチル (Frank Churchill) が、父の再婚に際して、祝いの挨拶を述べに来るのが遅れていることについてである。幼くして母を失ったフランクは、母方の親戚、チャーチル夫妻 (the Churchills) の手で育てられ、遠いヨークシャーのエンスコーム (Encombe) に住んでいる。ナイトリーは、フランクの遅延について、エマに、どういう事情が

あるにせよ、二十三、四歳にもなった男性が実父に会うために一時養家を離れることができないなどということはありませんと主張する。それに対してエマは言う。

「詳しく事情を知りもしないで、人の行動を批判するのは、ひどく不公平なことですわ。家族の中に入って生活したことのない人は、その家族の一人である人の困難がどんなものか、想像できるものではありません。私たちはエンスコームの状態とチャーチル夫人の気質とを知ることなしには、彼女の甥のできることを決めることなんて無理ですわ」(I, xviii)。

これだけ読むと、エマは、父親の許へ馳せ参じられないフランクを専ら弁護しているかの如くであるが、その少し前までは、フランクを開放しようとしないうェストン夫人の人々を非難していたのである。それが、ウェストン夫人の気持を推察することによって唯今見たような弁明に変わったわけである。従って、エマとナイトリーとの論戦は、額面通りには厳しいものとは受け取れない、論争のための論争の趣がある。それを許すほどに、エマとナイトリーとは遠慮のない間柄なのであろう。

次にコール氏 (Cole) の邸でのパーティーの席で、ウェストン夫人が、ナイトリー氏はジェイン・フェアファクス嬢 (Jane Fairfax) と結婚するのではなかろうかとエマに話しかける場面がある (II, viii)。後に詳述するが、ジェインはベイツ夫人 (Mrs. Bates) の孫娘で孤児であり、平素は遠く離れて住んでいるのだが、この頃祖母と伯母との家に滞在していたのである。ナイトリーがベイツ老嬢とジェインとを自分の馬車に乗せてコール家まで送り届け、帰りもこの馬車で送ると約束したことから、上述のウェストン夫人の憶測となったものである。エマはウェストン夫人に対して次のように答える。

「ナイトリーさんとジェイン・フェアファクスとですって！ そう  
いうことがどうして考えられますの？——ナイトリーさんが！——  
ナイトリーさんは結婚なんかしてはいけませんわ！ ナイトリー  
さんの家は甥のヘンリー坊やが継ぐことに決まっているのです。

——そうです。あの邸はヘンリーにあげなければいけないのです。ナイトリーさんが結婚なさるなんて、わたしは決して同意できません。それに、そんなことは全然可能性のないことです。あなたがそんなことをお考えになるなんて、わたしびっくりしましたわ」(II, viii)。

その後もエマは、ナイトリーは結婚すべきでないことを長々と説くが、これはエマがはっきり意識していないにせよ、ナイトリーが特定の女性のものになるということに堪えられない気持がそうさせているのではあるまいか<sup>1)</sup>。

二卷十五章では、またもやナイトリーはジェイン・フェアファクスと結婚するのではないかという話が出る。このときは、エマとウェストン夫人に、ナイトリー自身も加わっている。エマがナイトリーに、「あなたのようにそれだけ高く彼女を讚美していらっしやると、そのうちご自分でもびっくりなさるような羽目に陥りますよ」と言うと、ナイトリーは、「そのことなら六週間ほど前にコール氏からほのめかされました」と答える。その他、ナイトリーと二人の女性の間には、様々なやりとりがあるが、要するに彼の態度は曖昧である。彼が出て行った後でエマはウェストン夫人に、「ナイトリーさんがジェイン・フェアファクスと結婚なさるといふ件はどうお考えになりますか?」と尋ねると、ウェストン夫人の答えは次の如くであった、「それはね、エマ、彼は彼女に恋をしていないと考えることで頭がいっぱいというところじゃない? 仮に最後には恋をなさることになっても、わたし、別に驚かないわ」(II, xv)。

やがて、ウェストン氏主催のパーティーがクラウン亭 (The Crown) で開かれる。これより先、エルトン牧師は、エマが取り持とうとしたハリエットには身分違いとして目もくれず、パースへ行ってオーガスタ (Augusta) と親しくなり、やがて結婚する。彼女は積極的な社交家で、村のファースト・レイディー気取りでエマをも押しつけるような勢いである。クラウン亭においても、ダンスが始まると、エルトン夫人が全体をリードすることになる。このとき、エマが気にかかっているのは、ナイトリーが踊りに加わらぬことだった。

ナイトリー氏は、彼がいるべきでない場所に、つまり傍観者の間に混っていた。……彼は非常に若く見えた。……年輩の人たちの肥りすぎた体やかがんだ肩の上に見える、彼の高い、しっかりした、ピンと伸びた体つきは、誰の目も引きつけるに違いないとエマには思われた(Ⅲ, ii)。

これは、エマが、大勢の間に伍したナイトリーの姿を客観的な目で見、素敵だと思った最初だったのであろう。

さて、舞踏会は順調に進行し、夜食前の最後の二回の舞踏が始まるが、ハリエットには相手がなく、若い婦人で腰をおろしているのは、彼女一人だけとなる。エルトンがぶらぶら歩きまわっているのを、ウェストン夫人が、彼にハリエットと踊ってくれるように頼むと、彼は「僕は年老いた既婚者で、僕の舞踏時代は終わりました」と、にべなく断わる。かつてのハリエットとの気まずい思い出にこだわっているのである。ところが、

ややあって、嬉しい光景がエマの目を引きつけた。——ナイトリー氏がハリエットを舞踏の群の方へ連れて行くではないか！——エマは、その瞬間ほど驚いたことはなかったし、また、胸がおどったこともなかった。ハリエットのためにも、自分のためにも、喜びと感謝で心がいっぱいになり、彼にお礼を言いたいと切に思った。

……

彼の踊りは、彼女が予想していた通り、非常に巧みなものであった(Ⅲ, ii)。

夜食の後、再び舞踏が始まって、ウェストン氏がみんなに踊りに加わるように誘う。エマも手本を示すようにと頼まれて答える。

「すぐ踊りますわ、お申し込みを受ければすぐ」

「誰と踊るのですか」とナイトリー氏が尋ねた。

彼女は一瞬ためらったが、答えた、「あなたとです、お申し込みくださるなら」

「踊っていただけますか」と手をさし伸べながら、彼が言った。

「喜んでお相手いたしますわ。あなたは踊りがおできになること  
をお示しになったし、それに、わたしたちはほんとの兄妹ではあり  
ませんから、少しも差支えございませんわ」(“...you know we are  
not really so much brother and sister as to make it at all  
improper.”) (Ⅲ, ii)。

エマがナイトリーを見る目は、この舞踏会の夜に大きく変わったので  
はないか。幼いときから、余りに近い存在として見慣れてきて兄妹のよ  
うに感じていたナイトリーを、はっきり一人の男性として意識したので  
あろう。

初夏になり、ボックス・ヒルへのピクニックが行われる。暑い日で、  
皆が何となく浮かれない気分にいるので、フランク・チャーチルが、  
銘々が何かうまい話を一つ——ほどよくうまい話なら二つ——ごく退屈  
な話なら三つ、披露することにしようと提案する。すると、いつも取り  
とめのない長広舌を振るので定評のあるベイツ老嬢が、「わたしにはち  
ょうどいいわね。わたしが口を開けば忽ち退屈なことを三つ言うに決ま  
っていますから」と、あたりを見まわしながら言う。これを聞いたエマ  
は次の言葉を抑えることができなかった。

「あら！ ベイツさん、それは難しいかも知れませんわ——数が  
限られているのですもの——一度に三つだけですよ」(Ⅲ, vii)。

ベイツ嬢はエマの言う意味を悟るのにちょっと時間がかかったが、やが  
て顔を赤らめた。ウェストンが気を利かせたりして、一応その場は収ま  
ったが、この日の催しは愉快には展開しなかった。帰りに馬車を待って  
いる間に、エマは傍に立っているナイトリーに懇々とたしなめられる。

「どうしてあなたは、ベイツさんにあんなに思いやりがないので  
すか。彼女のような性格、年齢、境遇の女性に対して、どうしてあ  
んな高飛車な皮肉を浴びせられるのですか」(Ⅲ, vii)。

さらに言葉を尽くして、エマの考えの足りなさを指摘した後、ナイトリ



—は次のように言う。

「こんなことを聞くのは、あなたも愉快ではないでしょう。僕にも愉快どころではないのです——しかし、言わなければならないから、こうして言うのです。——忠実な助言によって、自分があなたの味方であることを立証するのに満足を覚えながら、また、あなたがいつかは僕を今より正しく理解してくれるだろうということを信じながら、手遅れにならないうちに真実を告げようと思うのです」  
(Ⅲ, vii)。

ナイトリーと別れて馬車に乗った後、エマは未だかつてない心の動揺と痛みを感じていた。彼女は家に帰り着くまでほとんどずっと、涙がほおを流れ続けるのに任せ、それを留めようとしなかった。

さて、話はハリエットのことに戻るが、エマの勧めでエルトンに向かっていた彼女の心は、エルトンが彼女を顧みず、オーガスタと結婚したことで大きな失望を味わう。しかし、その後、ジブシーの群の脅迫からフランク・チャーチルが彼女を救ってくれるという、ロマンスがかった事件が起こる<sup>2)</sup>。この恩義に対する感謝が元で、ハリエットはフランクを恋するようになっていたものとエマは想像する。ところが、やがて、フランクはジュイン・フェアファクスと秘密の婚約を結んでいたことが親しい者たちの間に知れわたる。エマはハリエットがかわいそうだと思い、彼女を慰めに行く。しかし、ハリエットはこのニュースを既に知っており、案に相違していささかの動揺も示さない。そして自分はフランク・チャーチルには何の特別な感情も持っていないと言う。エマは、ハリエットが、前に自分の受けた恩恵に対する深い感謝について語ったとき、フランクによってジブシーの脅威から救ってもらったことを言っているものと考えたのであったが、実は、舞踏会の折、相手がなくて情ない思いをしていたとき、ナイトリーが相手になってくれたことを言っていたのであった。ハリエットは、もしナイトリーさまが不釣合ということに気になさらないとすれば、自分はあの方を思い続けますと言う。

「ナイトリーさんはあなたの愛情に答えて下さると思うの？」

とエマが尋ねると、ハリエットは、

「はい、そう思います」

と遠慮がちに、しかし自信を以て答える。

エマが自分の心を知るのには、二、三分間で十分だった。彼女のよ  
うな精神は、ひとたび活動を開始すると、回転も速かった。真実の  
すべてに触れ——受け入れ——認めた。ハリエットがナイトリー氏  
を恋するということが、どうしてフランク・チャーチルを恋するこ  
とより特にいけないのだろうか。ハリエットが、その愛が報いら  
れるといささかでも望むことが、どうしてそんなにも恐るべき不届  
きなことなのだろうか。矢のような速さである考えがエマの心を貫いた  
——ナイトリーさんは私以外の誰とも結婚してはいけない(Ⅲ, xi)。

このことがあった翌朝、ナイトリーがエマを訪ねて来た。エマがフ  
ランク・チャーチルを愛しているものと思い込んでいた彼は、フランクの  
婚約の話を聞いて、さぞエマが落胆しているだろうと思い、慰めるた  
めに一時滞在していたロンドンから戻って来たのであった。エマは、彼の  
危惧に反して、フランクを愛したことはない旨を言明し、また、ナイト  
リーは、ハリエットの希望がまったくの幻想である旨をエマに告げる。  
こうして長い紆余曲折の末、二人は結ばれることになる。

エマとナイトリーとは、この作品に登場した最初から極めて打ち  
つけた間柄であった。しかし、だからと言って、すべての事に対して二人が  
一致した感想を持つとは限らなかった。今まで見てきた様々な場面にお  
いて、二人は意見が合わず、反発することも多かった。また、その一  
面、二人の心が近づく契機になる出来事も起こった。それらの屈折を通  
じて、エマとナイトリーが結婚に至る過程を、作者は綿密に巧妙に描い  
ていると言えよう。

なお、ハリエットは、再びロバート・マーティンから求婚され、彼と  
結婚することになる<sup>3)</sup>。

## (2) 点描のミステリー

舞台にまだ登場していない人物に関して、舞台の上の人物たちが噂話

をすることによって観客に予備知識を与え、興味をかき立てることは演劇においてしばしば用いられる手法である。『エマ』においてフランク・チャーチルが姿を見せないうちから、人々の話題に上ることによって読者の期待を喚起し、やがて登場して他の人物たちに伍して活躍するのはこの手法によるものであろう。まず、ウェストン氏邸のクリスマスに集まった人々は、父親の結婚の祝いを言いに来訪することになったフランクについてウェストン氏から何回か繰り返し話を聞かされる。特にエマはフランクに関する情報に興味を感じる。

エマは結婚はしないと決心していたはずではあったが、フランク・チャーチルの名前を聞いたり、彼のことを考えたりすると、興味を感じずにはいられなかった。彼女はしばしば——特にフランクの父親がテイラー嬢と結婚してからは——もし自分が結婚するとすれば、年齢、性格、身分ともに、彼こそ自分にぴったりの人だと思った。両家の深いつながりから言っても、彼は全く自分に属すべき存在だという気がした。二人を知っている者なら誰でもが思いつくに違いない縁組だと考えずにはいられなかったのである。……彼に会ってみたいという好奇心は強く、彼が感じのいい人であって欲しい、ある程度は自分を好いてくれるようにという願いもはっきりしていた (I, xiv)。

ウェストン氏の話によれば、フランクは一月の第二週ごろには父の家に来られるはずなのだが、ウェストン夫人がひそかにエマに告げるところによると、チャーチル夫人が気むずかしい、偏屈な婦人なので、彼を手離す気になれるかどうか疑わしいという。案の定、フランクからは言いわけの手紙が届いて、予定の日には彼は来なかった。(この時に、エマとナイトリーとの間に交された議論については既に見た。)

いよいよフランクが現れたのは初夏の頃である。父の家に着いた翌日、彼はウェストン氏と共にエマの家を訪れる。

あんなに長く噂にのぼっていた、あんなに興味の的だったフランク・チャーチルが、現に目の前にいるのだ——引き合わされてみると、彼を褒めるために費やされた人々の言葉も多すぎはしなかった

と思われた。非常に美青年だった。背丈、風姿、応対ぶり、すべて非の打ちどころがなく、その顔つきには、父親ゆずりの気魄と活気があふれ、機敏で賢明そうに見えた。これならば好きになれる、と彼女は立ち所に感じた(II, v)。

この辺りの描写は、劇場で、待ち設けていた観客の前に二枚目が立ち現れた趣がある。

常住者でなく、一時的にハイペリーに滞在している女性にジェイン・フェアファクスがいることは前に見た。孤児ながら、亡父の友人キャンベル大佐 (Colonel Campbell) の親切によって大佐の家に引き取られ、教育費を出してもらって勉学や音楽を習い、将来は子女の教育によって身を立てることになっている。祖母や伯母のところは、ときどき訪ねるだけなのだが、フランクが父親の許を訪ねた頃、丁度彼女もハイペリーに来ていた。

さて、フランク・チャーチルは最初にエマを訪問した翌朝、再びエマの家を訪ね、前の日にエマの家からの帰途、ジェイン・フェアファクスを訪ねた話をする。彼は以前、ウェイマス (Weymouth) で彼女と知り合いになっていたのである。

エマがフランクに、ウェイマスではジェインと度々お会いになったのですかと尋ねると、彼は持って回った返事をして要領を得ない。そこでエマは次のように言う。

「まあ、驚きましたわ！ あなたのお答えは彼女自身がなさるのに劣らず慎重ですね。彼女の説明は、何事についても、はっきりしないところを沢山に残しています。とても控え目で、どなたについての消息もほんの少しでも話すのを、てんから遠慮してしまうのですから。あなたは、彼女との交際については、お好きなだけお話しになっていいのだと思いますわ」(II, vi)。

エマのこの言葉に励まされてか、フランクはウェイマスでジェインと度々会ったと話し、また、キャンベル大佐夫妻の人柄についても語る。そして、ジェインのピアノの演奏が見事だという話もする。このことが

ら更にフランクは、ある男性がある女性と婚約し、結婚間際だったが、彼はこの女性の演奏よりも、その友人であるジェインの演奏を聞いたがったと語る。この男性と女性というのが、キャンベル嬢と、その婚約者ディクスン氏 (Dixon) のことであることをエマは鋭敏に推察し、こういう場合のキャンベル嬢と、ジェインの気持はどんなものだろうと想像を回らす。この問題についての種々の会話の後、エマは次のよう言う。

「フェアファクス嬢を悪く取る理由は、私にはございません——これっぽちも——ただ、言葉と態度とがあんなに極端に絶えず用心深くて、人についてはっきりした考えをおっしゃるのをあんなに警戒していらっしゃるのは、何か隠し事があるのじゃないかと疑われがちだ、ということは言えますわね」(II, vi)。

このエマの言葉あたりから、ジェインには何か秘密があるのだろうかという疑念が読者の心に湧くことになる。

フランク・チャーチルが、ただ理髪だけのために、ロンドンまで十六マイルの道のりを往復するという事件が起こる。エマは、べつに悪いことはないが、おしゃれな、ばかげたことと思う。ウェストン夫人も、「若い人には気まぐれなところがありますね」と、気に入らない様子を見せる。辛辣だったのはナイトリーで、「ふん！ 思っていた通りの、くだらない愚かな男さ」とつぶやくのが聞かれる。しかし、この理髪店行きは、実は他に目的があったことが後になって分かる。従ってそれを批判する言葉もすべて見当外れだったわけである。

ハイベリーの新興資産家コール氏の邸でパーティーが開かれる。その席でコール夫人が、ベイツ老嬢の家に素晴らしいピアノが届けられた話をする。キャンベル大佐からジェインへの贈り物だろうというのが大方の意見だったが、ジェイン自身も贈り主について見当がつかないという。そこでエマとフランクとがこのことについて推理する。

エマの想像する贈り主は、まず、キャンベル大佐、次には大佐の娘でジェインの親友のディクスン夫人ということになる。次にはディクスン夫妻の共同の贈り物だろうということになり、遂にはディクスン氏単独

の贈り物だろうということになる。つまり、ディクソン氏がキャンベル嬢に求婚した後で、ジェインに恋をするようになったのか、それとも彼女の方で彼を愛していることに気づいたのではないかというような憶測が述べられる——そう言えばウェイマスで、ジェインが船から落ちそうになったとき彼女を救ったのもディクソン氏だったというのではないか。エマがこれらの推測を述べるたびに、フランクは何の抵抗もなく賛成する。彼は次のように言う。

「あなたの推理なされるままに、僕の判断は動いて行きます。最初、キャンベル大佐が贈り主だとあなたが考えていらっしゃるように見えた間は、それは、父親らしい心遣いとして、最も自然なことだと思いました。ところが、ディクソン夫人のことをおっしゃるのを聞くと、女性どうしの温かい友情の贈り物と考える方が、ずっとありそうなことだと感じました。それが今は、恋の贈り物としか見られなくなりました」(II, viii)。

伶俐なはずのフランクが、このように何ら独自の意見もなしに相手の言葉に盲従するのは少々あやしいぞと敏感な読者は感じるであろう。

ウェストン夫人、フランク、ハリエット、エマなどがベイツ夫人の家を訪ね、着いたばかりのピアノをジェインが弾くのを聞く。多くの楽譜がピアノと共に届けられており、それを見たフランクが「キャンベル大佐は何と行き届いているんだろう」などと言う。エマはディクソン氏のことが頭にあるので、フランクの言葉は辛辣すぎると思うが、ジェインの顔を見ると、歡喜の微笑が浮かんでいるので、この愛らしいまじめな感じのジェインが不逞な感情をい<sup>か</sup>いでいるのだろうかと疑う。

フランクのための舞踏会を開こうという案が出て、ウェストン家の部屋では狭すぎるから、クラウン亭 (The Crown) を借りようということになり、種々計画が練られるが、突然チャーチル夫人が病気だという知らせがあって、フランクは急遽ヨークシャーへ帰ることになる。舞踏会は勿論中止である。彼はエマに再会を約してハイベリーを離れる。彼がここに滞在したのは二週間であったが、この間にエマは何度か彼の来訪

を受けたり、社交の席で会ったりして、彼が自分に好意を抱いていることを感じ取っていた。彼女の方でも、時に強く、時に弱く彼に惹かれるものがあった。

一方、ジェインは三ヵ月滞在の予定でハイペリーに来たのであったが、なかなか動きそうな気配はない。キャンベル夫妻はアイルランドに行っていて、彼女にもそこに来ないかという誘いの手紙が来ている。デイクスン夫人からも熱心な勧めが届く。「結構な招待に応じないで、窮屈なベイツ夫人の家に留まっているのにはどんな強力な理由があるのだろうか？」とエマは訝る。

牧師のエルトン氏が結婚したので、ハイペリーの人々は、競って夫妻を晩餐会に招待する。エマは、がさつなエルトン夫人が嫌いであるが、やはり夫妻のための晩餐会を開くことにする。その席で、ジェインが毎朝早く郵便局へ手紙を取りに行くという話が出る。エルトン夫人がそれを聞きつけて、体の弱いジェインはそんなことをしてはいけない、今後はうちの召使が郵便局へ行くついでに持って来させるようにするから、と言う。ジェインは「私はできるだけ戸外に出るようにと忠告されていますので、いつもどこかを散歩しなければならないのです。それで郵便局を目標にしているのです」と言って、エルトン夫人の申し出を固く断る。エマは、彼女が誰か心から愛している人からの便りを期待しているのではないかと推測するが、言葉には出さない。

エマがハリエットを妹のように愛しているのに対抗しようというつもりなのか、エルトン夫人は何かにつけてジェインの面倒を見ることに熱心である。ジェインが家庭教師の職につく予定だと知って、自分の知り合いの上流婦人の家庭をやっきになって世話をしようとする。しかし、ジェインは少しもその話に乗ろうとせず、辞退する。彼女は次のように言う。

「ご免なさい、奥さま、わたし、そんなに急ぐ気持はございませんの。自分でも問い合わせをしておりますし、友だちに問い合わせをしていただくのも気が進みません。時期については、はっきり

決心がつけば、長く職が見つからないということはないと思えます。ロンドンには、問い合わせればすぐに何かが見つかる周旋屋がごぞいます——人間の肉 (human flesh) と言わないまでも——人間の知能を売りさばく周旋屋が」(II, vii)。

これを聞いたエルトン夫人は、「まあ、あなた！ 人間の肉ですって！ ぎょっとするようなことをおっしゃるわねえ」と言う。平素おとなしく、つつしみ深そうなジェインが示したこの反面には、エルトン夫人ならずとも驚くであろう。

フランクからウェストン夫人に手紙が来て、チャーチル夫人が療養の都合でロンドンに移ることになったという。さて、チャーチル夫人はロンドンに来たものの、街の騒音に耐えられず、十日ほど後にはリッチモンドへ移ることになる。フランクは前より一層頻繁にウェストン家を訪れることができるようになった。そして五月にはクラウン亭で舞踏会が行われることになる。エマは前に舞踏会が計画されたときの約束通り、フランクと踊る。(この時の詳細については既に述べた。)

エマ、ハリエット、ウェストン夫妻、フランク、ジェイン、ベイツ老嬢、等で夕方散歩していると、医師のペリー (Perry) が馬で通りかかると。フランクがウェストン夫人に、「ペリーさんが馬車を買うという計画はどうなりました？」と尋ねると、夫人はそんな話は聞いていないと答える。フランクは、彼女の手紙に確かにそう書いてあったと言い、では、自分は夢に見たのだろうかと言ふ振りをする。すると、ベイツ老嬢が、「私はペリー夫人から馬車の話は聞いたけれど、よその人には誰にも話していません」と言い、「ねえ、そうでしょうか？」とジェインに念を押す。その後、皆でエマの家の広間に入ってから、アルファベットの一字ずつが記してある札を並べて「文字遊び」をすることになる。フランクはジェインの前に「しくじり」(blunder) という文字を並べる。勿論、先程の馬車の一件への言及である。フランクは次には「デイクスン」という文字をエマに示し、さらにそれをジェインに渡す。彼は思いのままに、関係ある人々を翻弄している感じである。



ドンウェル・アビー (Donwell Abbey) でのイチゴ摘みの日、ジェインは途中で帰り、その後十五分ほどしてフランクが興奮状態で到着し、チャーチル夫人の病気のため遅れたと弁解する。彼はこちらへ来る途中でジェインに会ったと言うが、そのとき二人の間に何か<sup>いさか</sup>諍いがあったのかも知れない。

その翌日はボックス・ヒルへの遠足だった。フランクが、「ちょっと知り合っただけで結婚して、それから死ぬまで後悔のし続けという男が実に多い」と言うと、ジェインが次のように答える。

「そういう不幸なことは男の方にも女の方にも時々起こりますが、そう度々起こるとは考えられません。せっかちな無分別な愛情が起こることはあるかもしれませんが——いずれ覚める時が来るのが普通だと思いますわ。不幸な交際を始めて、それに縛られて、生涯思うに任せず、惨めな生活を送るような人々はただ性格が弱くて優柔不断なのだと思います」(Ⅲ, vii)。

作者は何の説明も加えていないが、上の言葉を発したときのジェインが、フランクと別れることを考えていたことに、読者は後に気がつくであろう。

ボックス・ヒルのピクニックの翌朝、エマはベイツ夫人の家を訪ねる。ジェインは彼女に会おうとしないが、ベイツ老嬢から、ジェインが、エルトン夫人に勧められた家庭教師の口を引き受けたという話を聞かされる。ジェインは朝からキャンベル大佐やディクスン夫人への長い手紙を書いて涙を流し続けだという。

翌日、チャーチル夫人の死を伝える急使がウェストン家に到着する<sup>4)</sup>。生前は、気ままな振舞いによって人々の反感を買った彼女だったが、今やすべての毀誉褒貶の彼方へ去ってしまった。

ジェインがひどく健康を害していると聞いて、エマは、ハートフィールドの彼女の家に来て一日をすごして気分の転換を計ることを勧める手紙を出す<sup>5)</sup>が、使いの者が断りの口上を伝えてくる。次には馬車で外を走

らせてみることも勧めるが、短い断りの手紙が来る。病人によいというクズウコン (arrowroot) を届けると、返してよこす。後になってエマは、ジェインは運動には耐えられないという理由で、彼女と一緒に馬車で出かけるのを断ったその日の午後、戸外を散歩していたという話を聞く。ジェインがエマの親切を受けまいと決心していることは明らかであった。

チャーチル夫人の死去から十日ほどたった頃、エマはウェストン夫人から、フランクとジェインとの秘密の婚約のことを聞かされる。この日の朝、フランクがウェストン氏にこのことを告げに来たのであった。チャーチル夫人の死が、これを可能にしたことは明らかであった。エマは大いに驚きもし、また、憤慨もする。十月にウェイマスで婚約を結んで、それから二人でハイペリーへ来て、率直と素朴さを装って、みんなを試験し、だまし続けたという感じであった。

ウェストン夫人がエマを訪ねて、息子の許婚としてのジェインに会って来た話をする。ジェインは、「婚約に入ってから、一時間と心の落ち着く時はありませんでした」と言ったという。いろいろと話を聞くうち、エマはジェインの気持が分かるように思い、早いうちにもっと親しく彼女と交際すべきだったと感じる。

フランクからウェストン夫人に送られた手紙を、エマも読む。その中でフランクは相当勝手な自己弁護をしつつ、自分がピアノをジェインに贈った事情、また、ジェインから来た婚約解消を告げる手紙に対し、彼女を宥める返事を書いたのだが、送るのを忘れていたことなどを告げていた。

以上、小説『エマ』の中の、フランク・チャーチルとジェイン・フェアファクスに関する部分の進行を、章を追ってたどり、振り返って見た。これらの部分は、作品中の所々に散在することによってこそ、物語にミステリー的な要素を与え、全体としての厚みと興味を増しているものである。それらを、今私がしたように抜き出して整理することは、作者の本意には反することかも知れない。しかし、読者としては、この

作業によって、作者が必要な材料を提供していく手順が明瞭になるということは言えよう。

言うまでもなく、ジェインとフランクとを回るミステリーは、間にエマが介在することにより増幅される。ウェストン夫妻は、フランクとエマを結婚させることは、兩人の年齢や生い立ち、両家の関係等から見て当然のことと考えているし、ハイベリーの人々の多くも、それを期待している。しかも、フランクは、ハイベリーに現れた当初からエマに好意を示し、その後も事あるごとに彼女に近づいて行く。読者はその次第を読み、しかも所々でジェインとフランクとの交渉を知らされることによって興味がそそられるわけである。

ただ、私が疑問に思うのは、フランクはジェインと婚約しているのに、何故にエマと親しくするのかということである。彼がエマに近づくのを見て、ジェインは不愉快そうな反応を示し、遂には思いつめて破局寸前にまで進むことを思うと、フランクは一体何を考えているのかといぶかしくなってくる。彼は単に flirtation を楽しんでいるのであろうか。それとも、ジェインが思い悩むのを見て快感を感じる sadist なのだろうか。オースティンの作品に現れる他の不良青年たち——ジョージ・ウィッカム (George Wickham)、ジョン・ウィロビー (John Willoughby)、ヘンリー・クローフォード (Henry Crawford)、ウィリアム・エリオット (William Elliot) 等——に比べれば、フランクはあくどさが少ないと言えるかもしれないが、一方、動機が明確でないだけに読者は戸惑いする結果になる。極言すれば、作者はただ話を複雑にするために、この無償の flirtation を描いたように思われる。

フランクが贈り主を明かさずにジェインにピアノを贈ることも、軽率な行為と言えよう。前日の理髪店行きのこともあり、彼が贈り主だと周囲の人々に気づかれるのが当然と思われる。エマがフランクの手に乗せられて、ディクスン氏などという人物を持ち出すことも、フランクの悪戯の罪深さと共に、エマの推理力のたわいなさを示すという、見方によっては好ましくない結果になっている。

ジェイン・ファアファクスは終始寡黙で表情は冷たく、地味な存在である。しかし、その彼女が突如 “human flesh” などという発言をする

と読者もどきりとさせられる。この女性の精神には、表面に表われた以上の、あるいは、小説の中で語られている以上の何ものかがあるのではないか<sup>5)</sup>、また読者に知らされない経歴 (history) があるのではないかと感じざるを得ない。

好意的に解釈すれば、この小説は、エマを中心とした小説であり、ジェインには脇役であるから、彼女についての細かい記述は省略されたのであろうとも考えられる。もし、彼女を中心とした作品が書かれたならば、一編の興味ある小説となったであろう。その場合には、彼女とフランクとの婚約はなぜ秘密にして置く必要があったのか——単にチャール夫人の圧制を恐れるがためだったのか——も、また、軽快で無責任なフランクと結婚したジェインが永く無事に結婚生活を送られるかも、明らかにされることであろう。

〔注〕

- 1) ナイトリーは、友人や家族のことを思い、結婚すべきではないとエマが考えるのは、彼女の愛の disguised expression だというのが Litz の説である。(cf. A. Walton Litz : *Jane Austen, A study of Her Artistic Development*, p. 140.)
- 2) J. P. Brown はこれを “mock-heroic rescue of Harriet” と呼んでいる。(cf. J. P. Brown in *Jane Austen* (ed.) by Harold Bloom, p. 93)
- 3) ハリエットに求婚を一旦断られたマーティンが、彼の剛毅な性格にもかかわらず再び彼女に求婚することを、チャール夫人の好都合な死にも比すべき安易な話の運びと見る評者もある。(cf. P. J. M. Scott : *Jane Austen, a Reassessment*, p. 67.)
- 4) チャール夫人の死は全プロット中で “fortunate coincidence” と呼べる唯一の事件である。(cf. W. A. Craik : *Jane Austen, The Six Novels*, p. 156.)
- 5) ジェインの reserve を deceit に発するものと見る評者もある。(cf. Laura G. Momegham : *Romantic Language and Education in Jane Austen's Novels*, p. 119.)